

大阪人

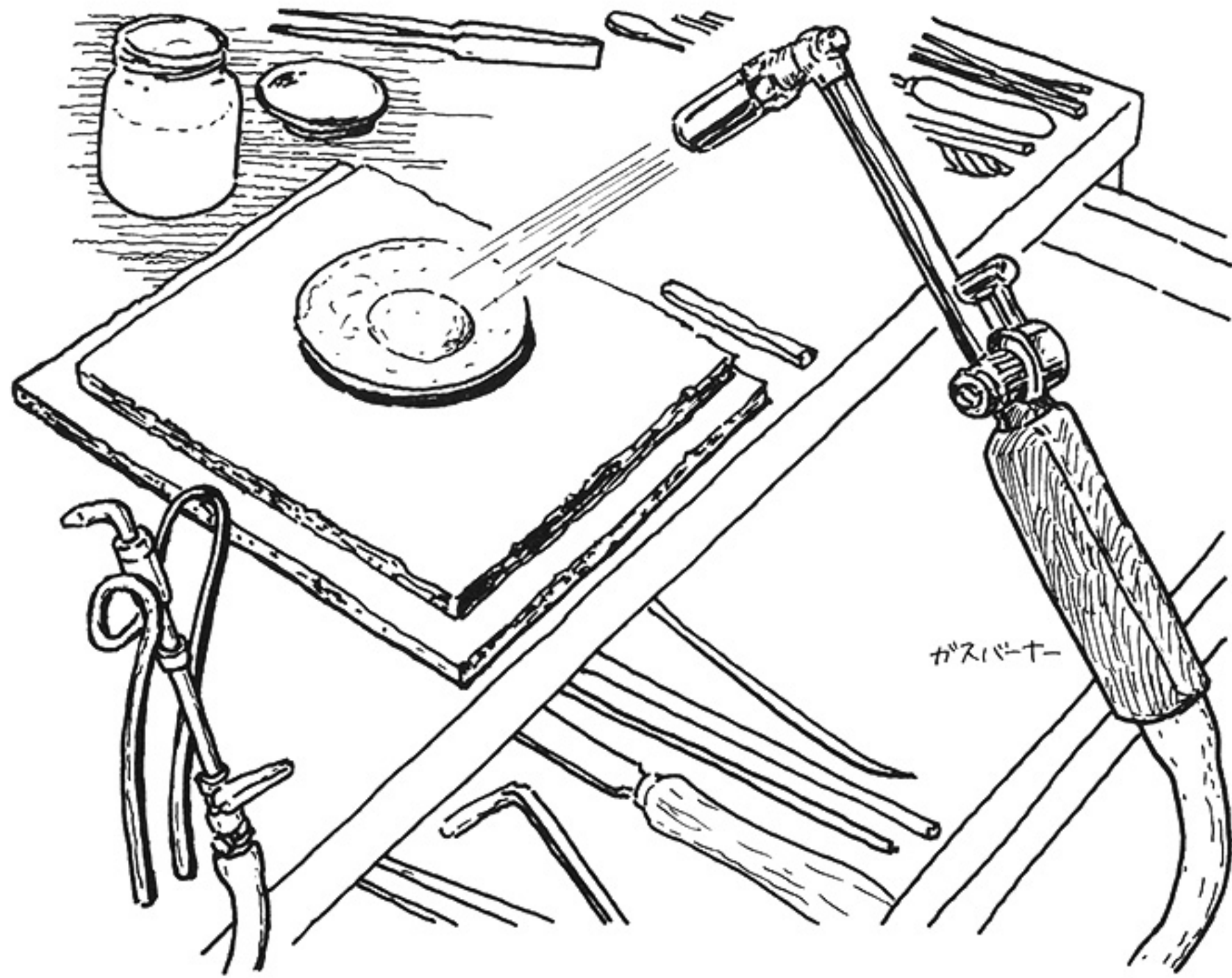
OSAKA-JIN vol.54

大阪スタイル
[再発見]マガジン

とろい銀幕の

「女優 有馬稲子」有馬稲子
「私はやっぱり大阪の女の子」池脇千鶴
少女としての女優 ●市川準
藤山直美を映画に撮る ●阪本順治
巻頭エッセイ・坪内稔典「大阪の夏の季語」
ミートTHEアート「ラースロ・モホリナギ」福田匡伸

アクセサリーのリフォーム

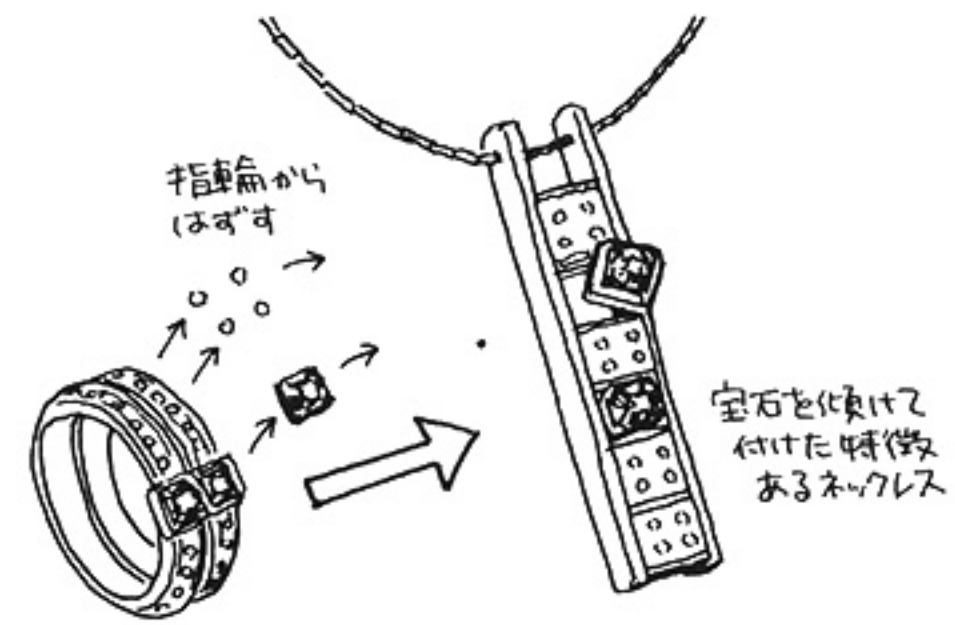


指輪をネックレスに改造する。かんざしをブローチにしてしまう。そんなリフォームを手がけている工房がある。指輪そのもののリフォームでも、元とはまったく違ったイメージのものに造りかえてしまう。

オプス造形の榎本恵子さんは主には新品のアクセサリー制作をおこなっているが、お客さんの希望でいつのまにかそうしたりリフォームの仕事も増えた。まったく違ったイメージに改造できるのは、それがほとんど創作に近いからだ。

たとえば、使われなくなった銀の指輪を高温で熱してドロドロに溶かしてしまおう。宝石ははずして置いておく。お客さんの要望からデザインを考えてつくり、元の宝石もうまく生きるように取り付ける。

榎本さんは経歴二十五年、昔はアクセサリーの制作だけをしてきたが、あるきっかけから六年前に



自分の店をもち、そこで作品を売りにながらお客さんとじかに接するようになって、そうしたリフォームの希望をもつ人が多いことがわかったのだ。

「女の人は二万九八〇〇円とか三万九八〇〇円で買った指輪をいくつもいくつも持っておられるわけですけど、いざブローチにしていこうと思うとひとつも納得できない」



ヤニ台
鉄の器にヤニが盛ってある。アクセサリーをここに押しつけて固定し、細かい加工を行う。

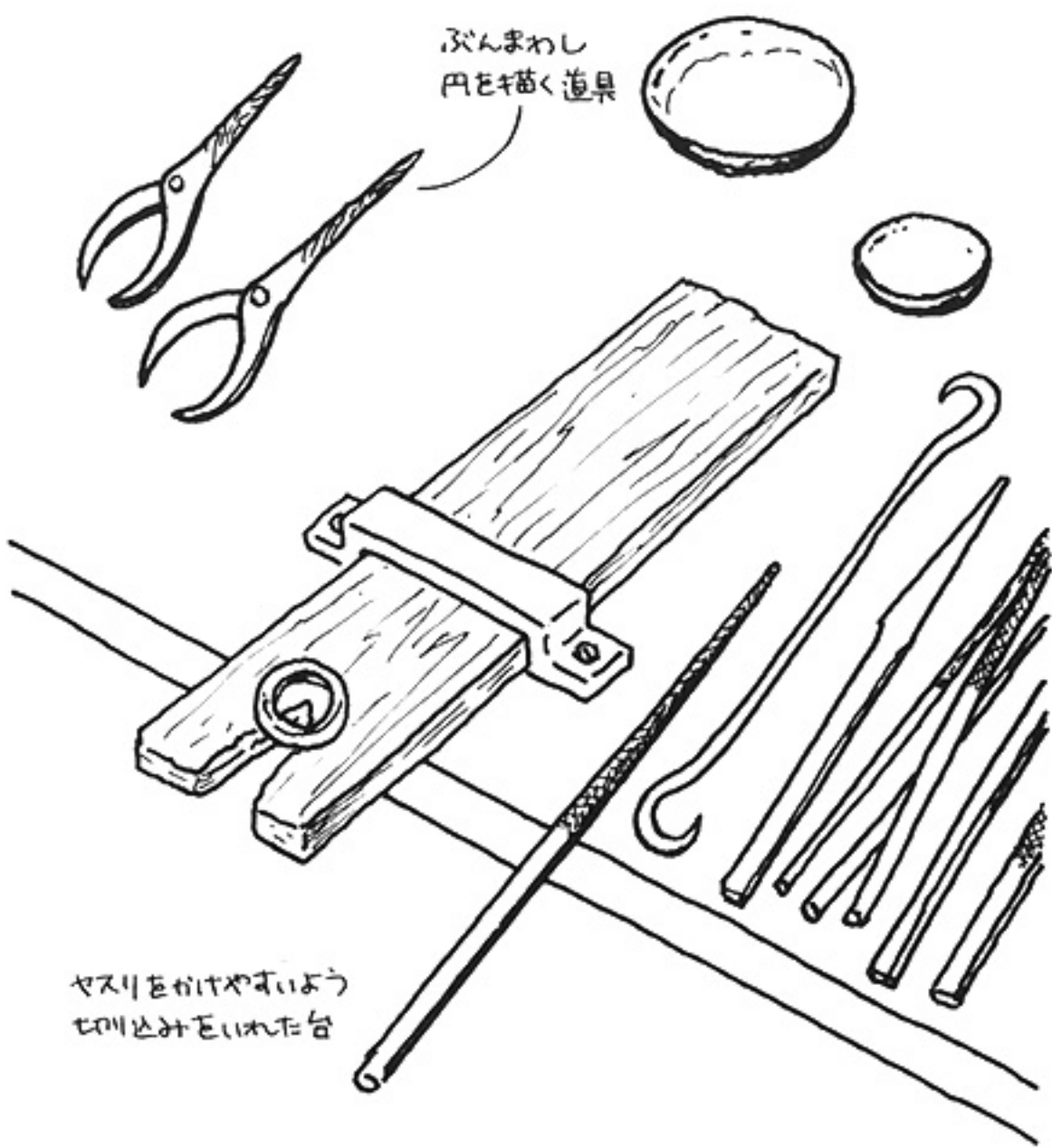
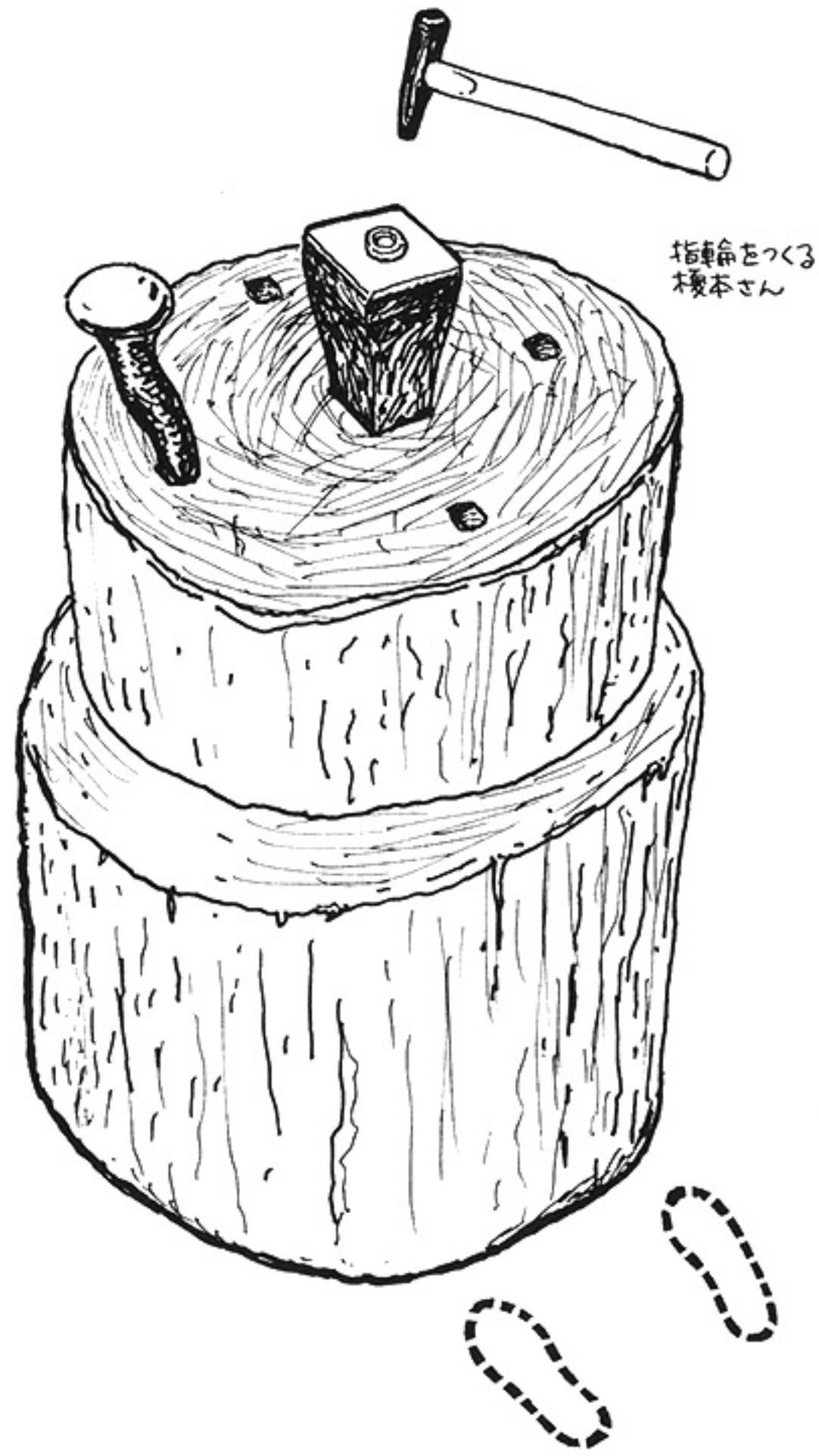
「自分の店をもち、そこで作品を売りにながらお客さんとじかに接するようになって、そうしたリフォームの希望をもつ人が多いことがわかったのだ。」

「女の人は二万九八〇〇円とか三万九八〇〇円で買った指輪をいくつもいくつも持っておられるわけですけど、いざブローチにしていこうと思うとひとつも納得できない」

豪華なものが欲しいのではない。自信をもって身につけられて、自分らしいと思えるものができるなら少しお金をかけてもいいということだ。

お客さんから預かった三〜五個から一つしか指輪ができない。ある程度厚みもあってオリジナリテ

イのあるものにしたから。それに不純物などがあって元のものが全部使えるわけではないからだ。製作工程を見せよう。先に書いたように、金属を熱で溶かす。いくつかの銀のリング部分を焼きあてる。千度くらいだそうだが、金属が液体のように溶けた。純度が足りなかったり量が少なければ素材の銀を追加する。さらにパーナールをあて続けると液体は真っ赤な玉のように輝いてくる。よし、というところで型枠に流すと一瞬無骨な銀のかたまりである。



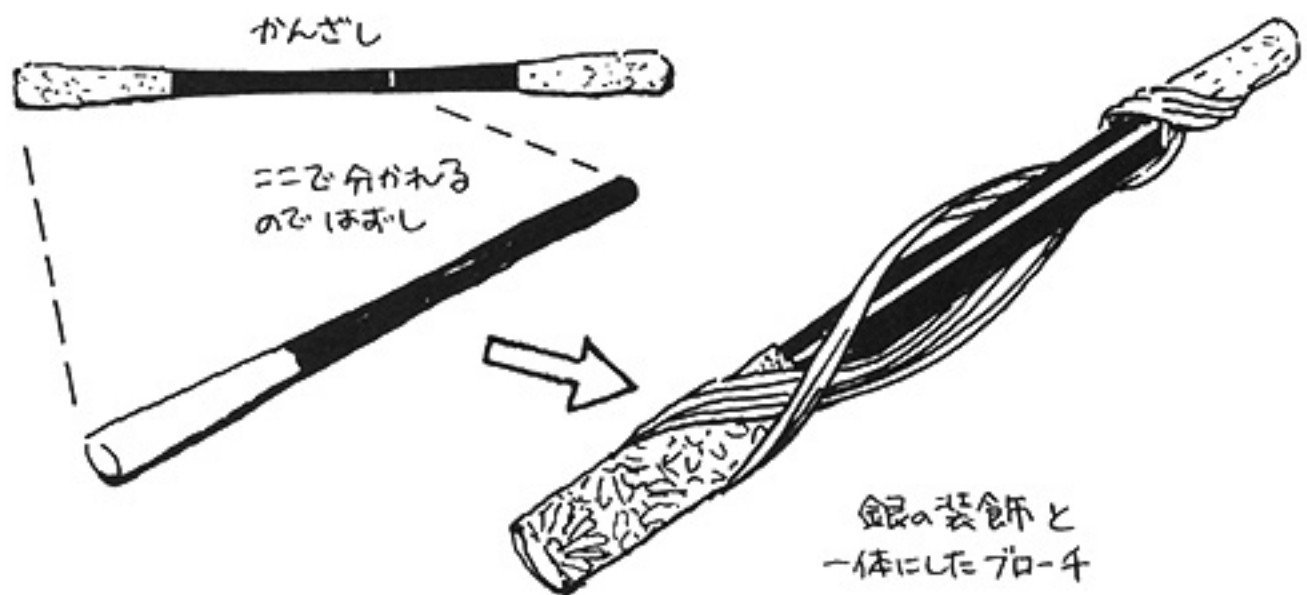
これをかなづちでたたいて形にしていく。なかなか時間がかかる。形ができてくると細かいところをヤスリで整え、ヘラで磨く。たいてい、こするうちに金属は締まって強くなる。実は工程はもっと複雑であるが、オリジナルな装身具が完成する。

リフォーム費用は銀の指輪で普通二〜三万円くらい。やってもらったらよかったというので、次にまた古いアクセサリーをお客さんがもってくる。金属だけでなく象牙やべっこうの加工も必要ならやってみよう。

そのうちアンティークの鏡で金

属枠が壊れたのを一緒にもって来て、これは直せませんか？古美術の業者も聞きつけてきて彫刻の欠けたところを修理してほしいと言ってきた。金属の知識と経験があるから、やってできないことはないが「何か知らないけど、駆け込み寺状態やねえ」と榎本さんは苦笑している。

かんざしをブローチに造り変えてほしい、とあるお客さんから頼まれた。アイデアを色々考えてみる。留め金具を取り付けなくてはならないがそんなとき元の品、この場合はかんざし、に穴を開けた



つけないで使い、しかもその人に似合うアクセサリーをつくる。

このように、榎本さんがするのは、材料として預かったアクセサリーを使い、あとはオーダーするようなもの。

「だからリフォームじゃなくて、リ・オーダーと呼ぼうかと工房のみんなと話しています」

オプス造形
大阪市中央区鐘屋町二一四一五
萬里ビル一〇三
☎〇六・六九四三・八八八〇